

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21592915

研究課題名（和文） 薬物依存症者への看護に関する質的変化の分析と理論基盤の構築

研究課題名（英文） The analysis of the qualitative change to nursing care for people with drug dependence and construction of its theory base

研究代表者

寶田 穂（TAKARADA MINORI）

大阪市立大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：00321133

研究成果の概要（和文）：薬物依存症者への看護には、難しい側面が多々あり、看護の質を高めるための検討はあまり行われていない。そこで、薬物依存症者への看護を実践している看護師たちに、質的なインタビューを行い、薬物依存症者への看護の質がどのように変化したのか、その変化には何が影響していたのかを明らかにした。その結果をもとに、薬物依存症者への看護の質的向上につながるような理論の基盤となる考え方について検討した。

研究成果の概要（英文）：Nursing care for people with drug dependence has many difficult sides and not much examination is being done to improve the quality. Therefore a qualitative interview was carried out to nurses who are nursing people with drug dependence and clarified what sort of changes has taken place in terms of quality and what influenced those changes. Based on those results, I examined the thought process which forms the theoretical base which can lead to the qualitative improvement of nursing care for drug dependent people.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域老年看護学

キーワード：精神看護学、薬物依存症、アディクション、看護、看護師、感情、転機、理論

1. 研究開始当初の背景

薬物に関連する問題は世界的な問題であり、日本も例外ではない。日本では、薬物に関連する問題の終息に向けて、1998年に「薬物乱用防止五か年戦略」が策定された

が、問題の終息には至らず、2008年には、「第三次薬物乱用防止五か年戦略」が策定され、継続した取り組みがなされている。戦略の目標には、「薬物依存・中毒者の治療・社会復帰の支援及びその家族への支援」

が含まれており、看護職もその役割を担う。しかし、薬物依存症者への看護においては、病棟内での暴言暴力、薬物の再使用、違法薬物の持ち込み、繰り返しの入退院といった対応の難しさの報告はあるものの、看護の質的向上にむけての系統的な実践や研究の報告を見出せなかった(寶田、2005a)。

これまでに研究代表者は、薬物依存症者への看護に関して、次のような検討を行ってきた。一般精神科病棟におけるアルコール・薬物依存症患者への対応への不安と施行錯誤しながらの看護について(武田ら、1998)。地域における薬物依存症回復支援の立場からみた医療への期待について(寶田、2002)。ブラジルサンパウロにおける治療施設のフィールドワークおよび看護師へのインタビューを通しての薬物依存症看護について(寶田ら、2003)。

また、日本の精神科病院入院期間中の看護については、看護の受け手である薬物依存症者本人と、薬物依存症者への看護を体験している(いた)看護師、地域で回復支援に携わる薬物依存症の当事者スタッフの語りを通して、その入院期間中の看護の意味について追究した(寶田ら、2005b;寶田ら、2006;寶田、2007)。

これらの検討を通して、薬物依存症者への看護においては、(1)看護師の感情は、薬物依存症者の抱いているネガティブで苦しい感情(怒り、孤立無援感、抑うつなど)と対称性をもち、薬物依存症者と接すること自体が困難であること、(2)看護師は自らのネガティブな感情を抱き、葛藤しながらかわろうとするも患者は回復せず無力感に陥りやすいこと、(3)無力感を感じながらも患者と向き合っていた看護師はその期間をターニング(転機)として看護に質的变化が生じ意味を見出していたこと、(4)ターニングの期間には“不確実、疑惑の状態にとどまってしまうような”消極的能力が意味をもっていたと考えられたこと、(5)患者の回復と看護師の成長にも対称性があり、相互の協力関係からなるコラボレイティブなアプローチの必要性、などが確認された。

以上のことから、薬物依存症者への看護の質的向上に向けては、何をどうするかといった実践方法よりも、看護師が自身に生じたネガティブな感情とどう向き合うか、患者と看護師のコラボレイティブな関係はどのようにもたらされるのか、といった感情や価値観の変化といった目に見えない質的な変化が重要であると考えた。

そこで、これまでの研究から、薬物依存症者への看護において重要と思われた事象や用語について検討し、薬物依存症者への看護の質的变化が生じた時期の看護師の体験について分析・解釈を行うことによって、薬物

依存症者への看護の質的向上につながる重要な概念が明らかとなり、薬物依存症者への看護に関する理論基盤の構築につながると考えた。

[文献]

寶田穂(2007):「薬物依存症者をケアする看護師とピア・スタッフの体験ーケアにおける無力感の意味ー」、博士論文(日本赤十字看護大学、乙第1号)、83ページ

寶田穂・武井麻子(2006):薬物依存症者にとつての精神科病院への入院体験ー複数回の入院を体験した人の語りからー、日本精神保健看護学会誌、15(1)、1-10

寶田穂(2005a):日本における薬物依存症患者への看護に関する文献的考察、大阪市立大学看護学雑誌、1、11-19

寶田穂・武井麻子(2005b):薬物依存症者にとつての精神科病棟への初めての入院体験ー1回の入院を体験した人の語りからー、日本精神科看護学会誌、14(1)、32-41

寶田穂・Costa, S. M.・Komura, H. L. A. (2003):サンパウロ市内の精神科施設における薬物依存症患者への看護。大阪市立大学短期大学部紀要、5、1-9

寶田穂(2002):病院と地域の間かけ橋を。精神看護、6(4)、50-55

武田恵子・寶田穂・川原稔(1998):急性期受け入れ閉鎖病棟における薬物依存症者の看護。精神看護、25(6)、15-20

2. 研究の目的

薬物依存症の治療や回復支援に関連する多領域の理論や概念との系統的な検討を行い、薬物依存症者への看護の質的变化と看護師の体験に焦点をあててインタビューを実施し、薬物依存症者への看護に対する考え方や概念を明らかにしていき、実践的な理論の基盤を構築する。このような目的の達成に向け、次のような目的で研究をすすめた。

(1) 文献レビュー

薬物依存症者への看護の質的变化において、重要と思われる事象や用語について、文献検討を行い、薬物依存症者への看護を説明するのにふさわしい概念を明確にする。

(2) 個人インタビュー

「薬物依存症者への看護において自身の考え方や実践が変化していった体験を有する看護職者」へのインタビューを行い、看護の質的向上への転機の様相を描き出し、ケアの転機に関連する事象や特徴を明らかにする。

(3) グループインタビュー

個人インタビューで明らかになった事象や特徴に焦点を絞り、「薬物依存症者の回復が感じられる看護実施の体験を有する看護

職」へのグループインタビューを行い、集団のダイナミクスを通して明らかとなった看護の質的变化の様相を描き出し、薬物依存症者への看護の核となる概念や概念間のつながりを考察する。

3. 研究の方法

(1) 文献レビュー

これまでのフィールドワークおよび研究で、薬物依存症者への看護の質の変化（転機）に関連すると考えられた「無力感」と「消極的能力」に焦点をあて、系統的に文献を検討する。

(2) 個人インタビュー

①研究方法

半構造化インタビューによる質的研究

②研究対象者

薬物依存症者の看護への自身の考え方や実践が変化していった体験を有する看護職者

③研究参加者（インタビュー参加者）

- ・薬物依存症治療プログラムを実践している保健医療施設を報道や文献、研究代表者のネットワークから抽出した。（全国で10か所に満たない）
- ・抽出した施設に研究への協力を依頼し、同意の得られた施設を訪問し、対象者（複数名）へのアクセス許可、あるいは紹介を受けた。
- ・看護職者に書面と対面で本研究の意図を説明した上で、インタビューへの参加に同意を得られた人を参加者とした。

④インタビュー方法

各々の施設や研究参加者と調整を行い、該当施設あるいは研究者の所属施設などでのインタビュー可能な場所を選択した。

インタビューの内容は、①薬物依存症者への看護実践や考え方の変化について、②変化に関連する体験談について、③薬物依存症者への看護において重要と思うこと、とするが、できる限り自由な体験談の語りを優先とした。

インタビュー内容は同意を得て録音し、逐語録を作成した。インタビュー時間は、1回30分程度を予定するが、状況に応じて短縮・延長も可能とした。

⑤分析

録音データは、逐語録におこし、帰納的に分析した。データ全体の文脈と照らし合わせながら分析した。

⑥倫理的配慮

所属する研究科の倫理審査委員会の承認を受けてから実施した。2010年1月承認。

(3) グループインタビュー

①研究方法

グループインタビューによる質的研究

②研究対象者

薬物依存症者の回復が感じられる看護実践の体験している（いた）看護職者

③研究参加者（インタビュー参加者）

- ・前回の個人インタビュー参加者の中で、「薬物依存症者の回復が感じられる看護実践の体験」について語った看護職者のうち、今後の研究への協力を依頼することに承諾が得られ、連絡先を確認できている看護職者に、本研究への参加依頼を行ってよいか確認した。
- ・①で了承の得られた看護職者に、書面と電話、書面と対面など、それぞれの看護職者が希望する方法にて、本研究の意図を説明し、同意の得られた人を参加者とした。また、研究者のネットワークや、参加予定者のネットワークを通じて参加者を募り、本研究の参加条件を満たし同意が得られた人も参加者とした。

④インタビュー方法

回数：2回。できる限り、毎回の参加を依頼するが、都合による欠席は妨げない。
実施日：参加者と調整の上、2012年5月と8月に1日行った

場所：大阪市立大学大学院看護学研究科学舎内

時間：1回、約180分

インタビュアー：研究代表者が行った。

研究代表者は、体験グループの実践グループダイナミクスに関する研修参加歴を有している（10年以上）。

質問内容：①患者理解の変化とその変化をもたらしたものの、②回復に対する考え方の変化とその変化をもたらしたものの、③看護に対する考え方（看護学校で学んだことなど）の変化とその変化をもたらしたものの、④その他、変化したものとその変化をもたらしたものの、などとするが、変化のプロセスについて、それぞれの体験を通して、互いの意見を聞きながら、思い浮かんだことを自由に話して欲しい。互いの考えや発想を妨げないよう、他者の意見への評価や批判はしないこととした。

⑤分析

インタビュー内容は同意を得て録音し、逐語録を作成した。録音データは、逐語録におこし、帰納的に分析した。データ全体の文脈と照らし合わせながら分析した。

⑥倫理的配慮

所属する研究科の倫理審査委員会の承認を受けてから実施した。2011年11月承認。

(4) 関連する研究の実施

本研究と関連する研究として、「アディク

ション問題にかかわる看護職者支援に関する研究」を行っている。アディクションとは、薬物依存、虐待、自傷など、「害があるとわかっていてもやめられない行為である。この研究は、アディクションに関連する問題にかかわる看護師のサポートグループを実践し、グループで語られた内容及びグループ・プロセスの質的分析を通して、アディクション看護における看護師サポートグループの意義やあり方について考察することを目的としている。

この研究の分析結果には、看護師のアディクション問題に対する感情や認識の変化も含まれ、本研究の質的な分析・解釈にとって、役に立つ知見をもたらす。従って、この研究と本研究とは関連し、並行して実施している。

4. 研究成果

(1) 文献レビュー

[無力感]

医学中央雑誌では、「無力感」を含む文献は、307件、Medlineでは、“helplessness” or “powerlessness”を含む文献は、685件、検索された(2010.03.18)。保健医療の領域において、この用語の使用頻度は高い。「無力感」の概念を明確に述べている文献は少ないが、多くの文献は、「無力感」をネガティブなものとして、あるいはリスク状態として取り上げていた。

これまでの薬物依存症者への看護についての検討からは、薬物依存症者を回復させることに無力感を抱いた看護師は、自身の無力を認め、患者を理解しようと対話を重要視し、またそうすることは、患者との信頼関係につながり、看護の質の向上につながっていた。従って、「無力感」を認知することはリスクというより、変化をもたらす重要な感覚であると考えられた。

[消極的能力 negative capability]

これは、詩人キーツが、書簡集キーツ書簡集、岩波書店、p65、1891/1952)のなかで、使用した用語であり、「不確実、神秘、疑惑の状態にとどまっていられるような」能力をさす。この用語を、精神分析家のビオンが引用し、精神・心理療法の領域で使用されるようになった。ビオンは、この能力を「知らないことにもちこたえる」ともし、「知らないことを認めるといふ自分は万能や全知ではないという喪失の悲哀を受け入れる」(松木、精神分析体験：ビオンの宇宙、2009)ことが求められるとしている。

前述した「無力感」とは、薬物依存症者とのかかわりによって、万能や全知ではない自分を突きつけられた結果生じると考えられる。それを認めることができないと、あるいはそ

れに耐えることができないと、薬物依存症者を回復させようと患者と闘うか、患者を避けることになるだろう。そうすれば、患者は何も変わらない。そして、患者自身の問題を看護師が引き受け続けることになる。

しかし、看護師が無力を認めると、患者は自身の問題と向き合わざるを得なくなる。薬物依存症という病気は、患者自らのコントロールのバランスの障害であり、回復においては、患者自らがコントロールをとりもどし、セルフケアを高めるしかない。患者が、自らの問題と向き合い、怒ったり苦しんだりしている間、無力な看護師には耐えることが求められる。その力が、消極的能力と関連すると考える。患者のセルフケアを援助するには、このような援助者の消極的能力が必要である。

以上のことから、薬物依存症者への看護を、患者自らがセルフケアできるような支援と考えた場合、看護師が自らの「無力感」を受け入れ、それにもちこたえることのできるような「消極的能力」は、薬物依存症者への看護において、重要な概念であると考えた。

(2) 個人インタビュー

[インタビュー参加者の概要]

関東地区、関西地区、中国地区、九州地区から計7つの病院に協力を依頼し、4つの病院から、対象となる看護師の紹介を受けた。紹介を受けた看護師(准看護師含む)には、個別に説明し、男性11人、女性3人の計14名からインタビューの参加への同意を得た。

年齢構成は、20代4人、30代4人、40代5人、50代1人であり、精神科勤務歴は、1~4年4人、6~10年6人、11~20年1人、20年以上3人であった。薬物依存症受入病棟での勤務歴は、5年以内5人、10年未満5人、10年以上4人であった。14人ともが、薬物依存症受入病棟への勤務希望をしていなかったが、移動となっていた。また、薬物依存の自助グループへの見学等は、11人が経験していた。

インタビュー時間は、最短25分、最長95分で、14人のインタビュー時間は計835分であった。

[薬物依存症者へのケアに関連する変化]

- ① 過去：怒鳴られたり、怒られたりして、恐い、嫌、といったネガティブなイメージを抱きながらの対応
現在：患者の関心、話し相手になる、雑談する時間を大切にす看護
- ② 過去：看護師としてこうあらねばならない、こうありたいという思いに基づいた看護
現在：できることはできる、ダメはダメ、間違った時は謝る、ごまかさない、素直

- に自分の気持ちを伝える対応
- ③ 過去：医師の指示に基づく生活管理、病棟管理
現在：看護上のこと、病棟生活上のことなど、看護の判断と裁量での実践
- ④ 過去：患者に薬物をやめさせる、病気を治すための看護
現在：患者を変える限界、医療ができる限界に気付く。
患者自身も、回復したいと思える、薬物をやめようと思えるような看護

[変化をもたらした気づき]

以上のような変化は、何か特別の出来事によって急に变化したというより、日々の看護実践の中で、変化の転機となるような気づきによって生じていた。特徴的な気づきは、次のようであった。

- ① 患者の話と対話することで、患者のライフストーリーをつかみ、ネガティブと思えていた言動の背後にある患者の思いに気付く
- ② 看護教育の中で抱いた「看護師としてあるべき姿」へのとらわれへの気づき
- ③ 患者とのパワーゲームへの気づき

[気づきをもたらした体験]

- ① 研修や書籍で得られた知識と実践がむすびつく腑に落ちる感覚の積み重ね
- ② 同僚、看護チーム、医療チームにおける連携やサポート
- ③ 回復過程をたどっている薬物依存症者との出会い（自助グループの見学）
- ④ 患者やアディクション問題への共感（患者と自身の感情との対称性、自分や周囲にも生じている問題）

[ケアの転機に関連する事象や特徴]

怒鳴ったり怒ったりする依存症者は、ネガティブなイメージを看護師に抱かせる。そのことは、看護師に「信頼関係とは何か」「看護とは何か」「自分自身にも依存的な側面はないか」などを問いかけとなっていた。その問いは、看護師として、人間としてのアイデンティティへの問いでもあった。一方で、その考えるプロセスを通して、自己理解が深まり、薬物依存症者に対して人として共感できる部分に気づき、その共感を通して患者理解が深まっていく。このようなプロセスを通して、患者との間に信頼関係を感じ、話し相手や雑談ができるようになり、それは、患者の回復に向けての変化に影響していると考えられた。

上記のような看護師の変化は、依存症患者への看護における専門的な技能・能力といえるのではないだろうか。そのような技能・能力は、すでにそのような技能・能力を持って

いる先輩のサポートを得ながら、自身で体験しながらつかんでいくと考えられた」。

(3) グループインタビュー

[インタビュー参加者の概要]

参加者は、計9人であり、薬物依存症者への看護の場が、病院7人、訪問看護1人、クリニック1人であった。参加者のうち、6人が個人インタビューの5月の参加者は8人、8月の参加者は7人であった。いずれの実施日も、途中10～15分の休憩を挟み、約3時間のグループインタビューを実施した。

[薬物依存症者へのケアに関連する変化]

グループダイナミクスを通して、個人インタビューで得られた結果と同様の変化が語られた。特に、看護師たちから薬物依存症者の看護が敬遠さえる傾向にあること、自分たちも最初は希望でなかったこと、それがケアの意味を感じるに至った変化について語られた。そこには、薬物依存症者に対する感情的な変化の様相も語られた。

そのような感情的な変化は、多様な価値観の受入、患者理解の変化とともに語られた。

[看護の質の向上をめざして]

看護師の多くは薬物依存症者に対するネガティブな感情が大きい傾向にあるが、今回インタビューに参加した薬物依存症者の回復を感じられた看護師たちは、自身の努力や他者からのサポートで患者理解を深め、また自身の価値観と向き合い多様な価値観への理解を深め、そのプロセスの中で、看護の質が変化し、それとともに患者との関係性も変化したと考えられた。

また、看護師は、落ち込み、傷つき、葛藤、といった感情的な困難を体験することも多く、看護師同士や医師といった他者からのサポートの重要性も浮かび上がってきた。

以上のことより、看護実践の基盤としては、薬物依存症という病気や、その病いをもつ患者の理解、看護師の価値観、看護師サポートへの着眼が重要であると考えられた。グループインタビューの結果は、まだ現在分析中であり、今後さらに分析をすすめたい。

また、薬物依存症者への看護の核となる概念や概念間のつながりを考察には、並行して行っている「アディクション問題にかかわる看護師支援に関する研究」結果とも関連している。その結果も包含し、今後、これまでの研究結果を総合して、薬物依存症者への看護の実践的理論基盤についてさらに検討する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 寶田穂、アディクション問題にかかわる看護師支援について 語り合える場としてのグループ、大阪市立大学看護学雑誌、査読無、6 巻、2010、59-61.
- ② 寶田穂、薬物依存症者への看護における無力感の意味 ～看護師の語りより～、日本精神保健看護学会誌、査読有、Vol. 18(1)、2009、11-19

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① 寶田穂（代表）・多喜田恵子・高間さとみ、アディクション問題にかかわる看護師サポートグループの検討 ～語られた話題の特徴に焦点をあてて～、第 22 回 日本精神保健看護学会、2012 年 6 月 24 日、熊本市民会館
- ② 寶田穂（代表）・高間さとみ、薬物依存症者への看護における質的变化の様相や特徴、第 31 回 日本看護科学学会学術集会、2011 年 12 月 3 日、高知市文化プラザ

〔図書〕（計 1 件）

- ① 寶田穂、メヂカルフレンド社、アディクション看護学、松下・日下編著、2011、薬物依存症とその看護、215-224

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寶田 穂 (TAKARADA MINORI)
大阪市立大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号：00321133

(2) 研究分担者（平成 23 年度）

高間 さとみ (TAKAMA SATOMI)
鳥取大学・医学部・講師
研究者番号：90588807

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

多喜田 恵子 (TAKITA KEIKO)
愛知医科大学・看護学部・教授

瀧尻 明子 (TAKIJIRI HARUKO)
大阪市立大学・大学院看護学研究科・講師